

北斗の人

新装版

司馬遼太郎



角川文庫

ほくとひと
北斗の人

しんさうばん
新装版

しほりょうたろう
司馬遼太郎



角川文庫 13248

平成十六年二月二十五日 初版発行

発行者——田口恵司

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

編集(〇三)三二三三八—八五五五

電話 営業(〇三)三二三三八—八五二一

〒一〇二—八一七七

振替〇〇—一三〇—九—一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——コウトブックライン

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社受注センター読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。

定価はカバーに明記してあります。

©Midori FUKUDA 1966 Printed in Japan

江苏工业学院图书馆

新装版
司馬坂太郎
藏 书 章



角川文庫 13248

目次

於菟松	三
蜂の巢	三
雪江	五
松戸	五
古賀ノ里	七
矢切河原	八
松戸の日々	九
泥細工	二
茶碗酒	三
旗本屋敷	三
愛憎	四

一四	一五	一五	二	九	八	七	五	五	三	七
----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---

馬庭念流

婚儀

桑と梅

中西道場

音無し又四郎

繁昌

謀叛

離脱

千駄ヶ谷

道場破り

源心房

異獣

戒行寺門前

上州へ

高崎

一六九

一八四

一九九

二二三

二三七

二四一

二五五

二七〇

二八四

二九九

三二三

三二六

三四〇

三五四

三六九

前橋	三八三
佐鳥浦八	三九八
指切り源蔵	四一三
武道額	四二七
馬庭の剣	四四一
草津	四五六
居鞍岳	四七〇
鐺川	四八五
三国街道	五〇〇
木暮	五一四
地藏ヶ原	五二九
引間村	五四三
夏の月	五五六
舌刀	五七〇
拳母城下	五八四

神田お玉ヶ池
略譜

解説

尾崎 秀樹
六六

六三 六八

於菟松

—

土地では、馬、馬、とよばれていた。

寧猛どうもうな感じがするほど、筋骨の発達しすぎた男である。

とくに顔がながい。

あごが胸まで垂れ、ものをいうとあらあらしくあごが動き、もうそれだけでも村の者はおそれた。

「けさ、大杉の下で馬がものを言っている、とびつくりしたら、幸右衛門様であつた」

幸右衛門。——姓は千葉氏である。ただし百姓だから、公然とは姓はとなえられない。

「若いころ、武士であつたぞ」

と称しているが、元来、猜疑さいぎぶかい村人たちは信用していない。

(どうせ法螺^{ほら}だべ。馬が武士であつてよいものか)
と肚^{はら}のなかでは笑っている。

多少、村人たちがこのいわば他村からの流れ者を様づけで尊敬しているのは、おなじ栗原郡の郡内に花山村という村があり、そこに苗字^{みょうじ}帯刀をゆるされた千葉清右衛門という郷士^{ごうし}の家がある。——馬は、その清右衛門家の次男としてうまれた、ということをつびとたちは知っているからだ。

次男というもののほど苦労多いものはない。

うまれ落ちたときから家とはなれねばならぬ運命をもっている。幸右衛門は成人すると、実家をはなれ、めしを食うためにさまざまな苦労をした。かれが剣術を身につけているのも、この技術でなんとかめしが食えるか、とおもったからである。次男坊にとって、芸だけが身をたすけるであろう。

奥州を転々とした。

武士だったこともある、というのは、若いころ秋田藩の藩士某の家に若党奉公をしたという経歴を、多少、馬は潤色しているのである。

この陸前^{りくぜん}(宮城県)栗原郡荒谷村^{あらや}にながれてきたのは、五年ほど前である。
流浪^{りうろう}中に、子もできた。

男ばかり三人である。

うんだ女は、馬が陸中氣仙郷けせんにいたころにめとった土地の娘だと村人はきいているが、しかしこの荒谷村にきたときはすでに死にわかれて世にいなかった。

——人生、功をなさずに、出来たのは子ばかりか。

と、ぞろぞろと子供をつれてこの村にやってきた幸右衛門はかなしかつたであらう。

かれにとって、まるきり縁のない村でもない。

荒谷村にきたのは、この村に千葉家の遠縁の老人が住んでいたからであった。そこで身を寄せるうち、ずるずると、養子になった。やっと幸右衛門は、三界さんがいに身を寄せる場所ができたといっている。

老人は、千葉吉之丞きちのじようといった。

この村の郷士で、若いころ村を出て相馬中村侯そうまにつかえ、剣技をもって鳴った。正真正銘の剣客であった。

名人とはいえない。相馬藩にいたころ、上山角之進かみやまという剣客と殿様の御前で剣技をあらそい、みごとに負け、退散して村にもどった。いまの暮らしは、農である。養父も養子も、いったん世に出ようとして夢中で世間をあるき、ついに世にやぶれて山村に身を潜めている、という点では、まったく共通している。

どちらも、野心家である。

が、その野心はくじけた。

だからおそろしく話があい、実の親子よりも仲がよかった。

養父吉之丞は、この山村に隠れてからなおも自分の剣を工夫し、ついにみずから北辰夢想流ほくしんむそうりゅうという流儀をあみだした。

それを、幸右衛門に教えた。幸右衛門は唯一の弟子といってよかった。

「幸右衛門、剣もかんじん、妙見さまみょうけんの信心もかんじんぞ」

といって、朝夕、邸内の妙見宮みょうけんみやの小祠ほこらに祈念させた。

妙見とは、北斗七星（北辰）のことである。古代中国にはこの北天にかがやく星を神としてまつる土俗信仰があり、それが仏教に入りまじって日本に渡来し、ふるくから「妙見さま」として諸国にひろまっている。

吉之丞老人は、この星の狂信者といっている。この星神が夢まくらに立ってついに一流儀を自得した、と信じ、流儀の名を「北辰夢想流」とした。

それは、まあよい。

食えなかった。こんな大田舎では剣もめしのたねにならないし、それに田がひどくすくない。

「養父上ちち、なにか致さねばなりませぬな」

と、馬の幸右衛門が、ある日、吉之丞老人にいった。

「なにをだ」

「世すぎ身すぎをでござります」

「そうだな」

ふたりの敗残者は、相談した。食えなくなれば医者でもやるしか仕方がない。

「幸右衛門、村で医者をやれ」

といった。

医者しかあるまい。医者ならば、二、三日、家にひきこもって書物をよめばなんとかなるだろう。幸い、吉之丞老人の親戚しんせきに、古川という土地で医者をやっている者があったので、そこで薬箱の使いふるしを譲ってもらい、それと「医方明鑑」四巻をかりてきた。その四巻を十日かかって書き写すと、なにやら、医学というものがおぼろげにわかってきた。

「業、ほぼ成りましてござりまする」

と、馬の幸右衛門が、養父の老剣客に報告したのは、それから二十日目である。

「それはよかった。このあたりの人間は達者だから、どういじくっても癒なをる者は癒る。心を大きくもって治療してやるがよろう」

と、老人はいった。

幸右衛門は、村中を触れあつた。

「きょうから医者をやろ。まだ脈診はふたしかゆえ、軽い病いの者から来いと、いった。」

村人どもは、おそれ入った。

「軽い病いで医者様にかかるばかねえもんだ」

と蔭かげであざわらった。村では、病人が、もはや息もたえだえになってあすも知れぬというときになってやっとよばれるのが医者ということになっている。医者と坊主はさしてかわらない職業だとおもわれていた。

だから、あまり患者がなかった。

あるとき、下ノ橋詰しもという百姓家からつかいが走ってきて、

「いそぎきてくだされ」

といってきた。

半里ほどある。走りに走ってやっと患家に駈かけこむと、患者は座敷に寝ていない。外にいるという。人でなく、馬だということであった。

「馬か」

幸右衛門はそれでもいやがらずに、

「馬でもよいわい。どこにいる」

と上機嫌で厩舎うまやへ駈けてゆき、なかに入って馬をみると、呼吸がひどくみじかい。

触れると熱があった。

「頭熱があるな」

といった。さいわい、幸右衛門の生家は郷士で、家には馬の医法がつたわっている。

幸右衛門は、目や舌をみてから、

「分明いたした。虫じゃな」

と言ひ、みかんの皮を乾した陳皮ちんぴ一分に黄蘗おうばく二分をまぜ、

「胡麻ごまを一皿、煎いてくれ」

と、患者にたのんだ。それができあがると、いま一皿の生胡麻をまぜ、それを陳皮、黄蘗ごとスリバチに入れ、さらに味噌みそ一皿、塩半皿を投入し、湯をそそぎつづがりがりと摺すりあげ、

「これをのませてみる」

とあたえた。

数日すると、おかげさまにてすっかりよくなりました、と人が礼にきた。

これが評判になって、客がついた。みな、馬である。

(妙なものだ)

とおもった。いったん馬を診ると、人間の患者はおそれをなすのか、ひとりもや

って来ない。馬と人間がおなじ医者にかかっている、というのが、人間の患者にとつては不名誉なのであろう。

幸右衛門は、馬医者になった。

心ならずも、であった。どうやらこの男の半生は、なにをやっても思うようにはいかないようであった。

二

食うためには、荒仕事もやった。喧嘩けんか口論ざた沙汰の仲裁、あるいは盗人、人殺しをつかまえるしごとである。

もっとも、このほうのしごとは触れあるかなくてもよかった。これでも荒谷村の武芸者である。幸右衛門の武名は近郷に鳴りひびいていた。

おりから事件があった。

そのころ奥州各郡をあらしまわっている盗賊に、

関東今吉

関東稲吉

という二人組があった。怪盗といいいい。敏捷びんしょうで大力で、剣の技は陸前白石で捕吏を一太刀で絶命させたというほどの腕をもっている。

それが玉造郡の鳴子温泉なるこにあらわれ、捕吏を相手にさんざんにたたかい、土地で「長崎小僧」とよんでいる山中に逃げこんだといううわさが幸右衛門のすむ荒谷村にきこえてきたのは、立秋もすぎたところである。

郡役所では近郷の村民をかりあつめ、鉄砲をもつ獵師十人を中心に山狩をするこ
とになった。

荒谷村にも触令ふれがきた。

村役人が「ぜひ」と幸右衛門の出馬をうながしてきたが、幸右衛門は出ない。
(勢子せこにはならん)

というつもりである。武芸を用いるのは、場というものが大事だ。演出といつていい。いずれ、藩の郡役所が手古てこずり、ひぎを折りまげてたのみにくるであろう。そのときこそ出よう、という肚はらづもりであった。田舎武芸者ながら、武芸の渡世のこつだけは知っていた。

ついに、庄屋しやうやが、郡役所の役人を案内してやってきた。

「よろしかろう」

と、幸右衛門は頭に鉢金はちがねをつけ、鎖の着込みを着、すねはまるだし、尻しりは禪ふんどしのみえるまでからげて、出かけた。

今吉、稻吉は、炭焼小屋にいる。すでに人を数人斬って、死を覚悟していた。